

『百人一首』の「暁」考

吉海 直人

〔要旨〕『百人一首』に「暁」は一例（三〇番）しか詠まれて

いないが、勅撰集の詞書に戻すともう二例（三六・七一）が浮上する。さらに「あさぼらけ」（三一・五二・六四番）・「よもすがら」（八五番）も対象となる。その他、「嘆きつつ」（五三番）・「やすらはで」（五九番）を含めて、「暁の時間帯」が内包している様々な問題点を分析してみた。その結果、暁の始まりは日付変更時点であることから、男女の「後朝の別れ」の時間帯と重なること、暁の前半は真つ暗だが、後半（あさぼらけ）は次第に明るくなっていること、だからといって「明く」を安易に夜が明けると解するのは危険であることを論じてみた。また暁の到来は視覚ではなく聴覚で察知したこと、視覚としては「有明の月」が象徴的に描かれていることも指摘した。百人一首はもちろんのこと、「暁の時間帯」の重要性はもつときちんと認識・把握されるべきである。

一、『百人一首』の「暁」歌

百人一首中に「暁」はわずか一例しか詠まれていない。その一首とは壬生忠岑の、

①有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし

（三〇）

である。そこで試みに百人一首の歌を出典である勅撰集に戻してみたところ、次の二首が「暁」題で詠まれていることがわかった。

月の面白かりける夜、暁方によめる 深養父

②夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ

〔古今集〕一六六番・三六

暁聞郭公といへる心をよみ侍りける みぎのおほい

まうちぎみ

③ほととぎす鳴きつるかたをながむればただ有明の月ぞ残れる
 (『千載集』一六一番・八一)

この三首を対象として、百人一首における「暁」について考えてみたい。最初に確認しておきたいのは、「暁」の時間帯である。古典において「暁」とは、現在の午前三時から夜明けまでの比較的長い時間帯を指しているとされている。必然的に前半の暗い時と、後半の明るくなりかけの時を内包していることになる。そうすると「暁」を漠然と「夜明け前」と定義した場合、それはまだ暗い頃、あるいは薄明るい頃という二つの解釈が生じることになる。従来はそのことにほとんど拘泥せず、安易に「夜明け前」として済ませていたようである。それで問題は生じないのだろうか。これが第一のポイントである。

たとえば②「夏の夜は」歌など「明けぬるを」とあることから、安易に夜が明けてしまった、即ち明るくなったと解されることが多い。しかし夜が明けてしまったら、もはや「暁」を過ぎたことになるはずである。これに関して小林賢章氏は、丑の刻と寅の刻(「五更」とも言う)の間が日付変更時点であることを前提とされた上で、「暁方」という表現に注目され、それが暁になりたての頃を指す限定表現とすべきことを提起してお

られる^①。もしそうなら、それは午前三時頃であるから、夏の夜といえども夜明けにはまだ随分間があり、当然あたりは真っ暗なはずである。

ついでながら歌に使われている「宵」は、夜を三分割した最初の時間帯であるから、「宵」からすぐに「暁」に移行することはない。その間に長い「夜半」が存するからである。この点にも留意すべきであろう。その上で、「暁」につながる夜の時間帯として、『百人一首』には、

④夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ
 (六二)

⑤よもすがら物思ふころは明けやらで関のひまさへつれなかりけり
 (八五)

の二首が詠まれている。清少納言の「夜をこめて」歌に関しては、一般的な夜通し(「一晚中」という意味ではなく、翌日(明く)にならないうちにと解釈したい^②)。要するに「暁」よりも以前の短い時間帯ということになる。また「よもすがら」の時間帯が過ぎると「暁」になる。この場合の「明く」にしても、視覚的な「夜明け」ではなく、日付が翌日になる意とすべきであろう(日付変更に関してはすべて小林論に依拠している)。

前に戻って③「ほととぎす」歌に関しては、題に「聞」とあって「見る」とされていらないことに留意したい。ほととぎすの鳴き声（聴覚）をたよりにその方向を向いたところ、時鳥の姿は見えず、「有明の月」が皎々と照っていたというのであるから、むしろあたりは暗い方がふさわしいと思うからである。

ついでながら「暁」との関連が深い「有明の月」とは、一般に満月以後の遅く出る月のこととされている。古典文学では二十日過ぎに出ている月が最もふさわしいとされているが、原則として「暁」（午前三時過ぎ）に出ている月であれば、月がどの位置にあるかと、それを「有明の月」と称することは可能のようである。なお①「有明の」歌に「月」という言葉はないが、「見え」ているのは「有明の月」で間違いあるまい（相手の女性とする説もある）。

では②の「月の面白かりける夜」とは、一体いつ頃の月であろうか。仮に月の上旬であれば、「暁方」に月は沈んで見えなはずである。下旬であれば、眼前の月を見ながら「雲のいづくに月宿るらむ」と詠じていることになる。また中旬であれば満月に近いし、ちょうど「暁方」に月が沈むので、これが一番ふさわしいかもしれない。

「暁」という時間帯に注目するだけで、このような雑多な問題が浮上してくるのである⁽³⁾。

二、「暁の別れ」と「有明けの別れ」

ところで忠岑の①歌は「有明け」とあるのだから、必然的にこの歌が詠まれたのは「暁」で、しかも「有明の月」が見えている時ということになる⁽⁴⁾。「有明け」というのは、たとえば月を伴わなくても、月の存在を前提にしている表現であるからである。その上で問題にすべきは、「有明けの別れ」である。前述のように月の上旬に「有明の月」は出ていない（暁闇）とすると、上旬には決して「有明の別れ」と詠じられないことになる。些細なことかもしれないが、「有明け」という歌語は、「有明の月」が出ている時に限定使用される言葉なのである。

一般的にはそれを「暁の別れ」とも称しているが、これなら月が出ていない上旬でも使用可能であろう。では「有明の別れ」あるいは「暁の別れ」の実態は、一体どのようなものなのだろうか。参考までに『後撰集』を見てみよう。私的詠歌の多い『後撰集』には、

・夢よりもはかなきものは夏の夜の暁方の別れなりけり

(一七〇番)

・いかでわれ人にも問はむ暁のあかぬ別れや何に似たりと

(七一九番)

・暁のなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや

(八六二番)

といった歌が少なからず認められる。また『源氏物語』賢木巻でも、光源氏は六条御息所との別れに際していかにも後朝風に、

・暁の別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな

(新編全集89頁)

と詠じている。これを文字通りに解釈すれば、「暁の時間帯の別れ」ということになるが、そういった把握だけでは不十分であろう。そもそも「暁の別れ」は、一夜を共にした男女の別れである。具体的には、訪れていた男が女の元から帰る際の「後朝の歌」として詠まれる場合が多い。そのために類型的にならざるをえなかった。

なお『後撰集』八六二番の「白露のおきて」には、「置きて」に「起きて」（起床）が掛けられている。男が帰るためには、まず起きなければならないからである。当然「暁起き」と

いう類似表現もあり、やはり『後撰集』に、

・おく露の暁起きを思はずは君が夜殿に夜離れせましや

(九一五番)

と詠まれている。また『和泉式部日記』にも、

女は寝で、やがて明かしつ。いみじう霧りたる空をながめつ、明くなりぬれば、このあかつき起きのほのことどもを、ものに書きつくほどにぞ例の御文ある。

(新編全集48頁)

とある。⁵⁵「寝でやがて明かしつ」とあるので、どうやら和泉式部は寝ないで暁（翌日）を迎え、さらに「明くなりぬれば」と視覚的に明るくなつてから、自らの「暁起き」の心情を書き綴っていたようである。

この「暁の別れ」は、まさしく「後朝の別れ」であった。「後朝の別れ」であれば、特に時間の指定はなくてもよさそうに思えるが、実際にはやはり「暁」の時間帯に別れることになつていたようである。その場合、男には真つ暗なうちに早く帰るか、それとも明るくなる頃まで留まって遅く帰るかという選択の余地があつた。もちろん帰りの遅い方が女に対する愛情が深いと解釈される。

なお「暁」になりたての時刻（暁方）は真つ暗なので、視覚的にそれを知るのは困難であろう。そうなると聴覚的に時刻の到来を察知したことになる。では聴覚的なシグナル（時計替わり）として、一体どんなものがあつたのだろうか。

原始的なものとしては「鶏鳴」、つまり一番鶏の鳴き声をあげることができる（どれだけ正確に時を告げるかは疑問）。たとえば『伊勢物語』一四段の、

夜も明けばきつにはめでたかけのまだきに鳴きてせな
をやりつる
（新編全集126頁）

などがその好例であろう。鶏が早く鳴いたのであの人（男）が帰ってしまったというのであるから、まさしく鶏の鳴き声が男の帰る合図となつてゐることがわかる。しかも「夜も明けば」とあるので、男が帰つたのはまだ夜が明けていない時刻ということになる（「まだき」は男と別れたくない（男を帰したくない）女的心情表現でもあろう）。

要するにここでは夜明け前に男は帰つてゐるのである。そのことは『古今六帖』所収の、

恋ひ恋ひてまれに逢ふ夜は暁の鳥の音つらきものにぞありける
（二七三〇番）

や『後撰集』の、

ひとり寝る時は待たるる鳥の音もまれに逢ふ夜はわびしか
りけり
（八九五番）

などにも詠まれている。

「鶏鳴」以外には、「鐘の音」（暁の鐘）もあげられる。これはお寺における六時の修行のうちの「後夜の鐘」である。ちょうど午前三時に鐘が打たれるということで、それが仏教とは無縁に、便宜的に男女の別れの合図として機能しているのである。だからこそ『後拾遺集』の、

暁の鐘の声こそ聞こゆなれこれを入相と思はましかば

（九一八番）

といった願望（反実仮想）の歌が詠じられたのであろう。

また宮中においては、古くから漏刻（水時計）を用いての「時奏」が行われていた。『源氏物語』賢木巻における光源氏と
隴月夜の宮中における密会場面は、

「寅一つ」と申すなり。女君、

こころからかたがた袖をぬらすかなあくとおしふる声
につけても

とのたまふさま、はかなだちていとをかし。

(新編全集105頁)

と記されている。小林氏も論じられていることだが、宿直奏の「寅一つ」を耳にした朧月夜は、それを聞いて「明くと教ふる声」と詠じている。この「明く」には「飽く」(飽きられる)が掛けられているのだが、ここはあくまで聴覚情報だから、視覚的に夜が明けたのを察知したのではなく、寅の刻になるつまり翌日になった(別れる時になった)ことを聞き知ったと解釈せざるをえない。

三、薄明の「暁」

ところで「暁の別れ」は、いつでも真つ暗な時刻に行われていたわけではない。前述のように「暁」が午前三時から夜明けまでを含む比較的長い時間帯なのだから、夜明け近くの別れも可能である。という以上に、別れを惜しむが故に帰りが遅くなることもしばしばあった。そのことは藤原道信の、

⑥ 明けぬれば暮るるものとは知りながらなほうらめしきあさ
ほらけかな (五二)

によっても察せられる。これも「後朝の別れ」を詠んだ歌であ

るが、「あさほらけ」とあるので既に暁の後半、つまり視覚的に明るくなりつつある時刻に近いことがわかる。この方が「後朝の歌」^⑥としてはふさわしからう。

また「後朝の歌」ではないが、百人一首にある、

⑦ あさほらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪 (三一)

⑧ あさほらけ宇治の川霧絶えだえにあらはれわたる瀬々の網
代木 (六四)

もあげられる(全三例)。ともに「あさほらけ」とあるから、薄明るくなる時間帯を詠じた歌ということになる。⑦は実際の「有明けの月」ではなく、月と見まがうような白雪を詠じた比喻表現なので、やや特殊な例と見ておきたい^⑦。

この「あさほらけ」とほぼ同じ時刻が「しのめ」「あけぼの」である(ただし百人一首に用例なし)。「曙」は『枕草子』初段冒頭の「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際」(新編全集25頁)が有名である。ただし「あけぼの」は歌語として確立していないので、ここではこれ以上問題にすることはできない(『枕草子』にも用例は初段の一例のみである)。では散文の例として、『源氏物語』帚木巻で光源氏が紀伊守邸から帰る

折の描写に、

月は有明にて光をさまれるものから、かげさやかに見えて、
なかなかをかしきあけほのなり。
(新編全集104頁)

とあるのはどうだろうか。「光をさまれる」というのは、次第に明るくなりつつある「あけほの」の時刻ということで、日の光によって「有明の月」が目立たなくなっているという意味である。

もう一つの「しののめの別れ」については、同じく『源氏物語』夕顔巻に、

いにしへもかくやは人のまどひけむわがまだ知らぬしのの
めの道
(159頁)

と詠じられている。「しののめ」に、男が女と別れて帰る道が「しののめの道」である。ここも既に「明けゆく空いとをかし」き時刻になっていた。早く『古今集』に、

・しののめのほがらはがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなる
ぞ悲しき
(六三七番)

・しののめの別れををしみわれぞまづ鳥よりさきになきはじ
めつる
(六四〇番)

などと出ており、明るくなりつつある「しののめ」の時刻も、

男女の「後朝の別れ」として詠じられることが多かった。当然『源氏物語』もそれを継承していることになる。

こういった「しののめ」「あさばらけ」の別れは、「暁の別れ」と同義ではあるが、視覚的な面から「暁」の後半部を指すと考えてよさそうである。ただし『古今集』に「鳥よりさきになきはじめ」とある点、たとえば片桐洋一氏は『古今和歌集全評釈(中)』において、

この歌は、その鶏の声より前に、すなわち夜明けよりも前に「しののめの別れ」を惜しんで泣いたと言っているのである。
(601頁)

と説明されている。これは「泣く↓鶏鳴↓しののめの別れ」の順であろうか。いずれにしてもこの場合は例外的に、「鶏鳴」が別れの合図として機能していないことになる。「鶏鳴」にしても、広い時間帯を覆っているであろう。

同様のことはほととぎすにもあてはまる。『古今集』の、
夏の夜のふすかとすればほととぎす鳴くひと声にあくるし
ののめ
(一五六番)

は、ほととぎすの鳴き声と同時に「しののめ」になっているのだから、やはり明るくなりはじめの頃であろう。だからといっ

て『後撰集』の、

・ほととぎすひと声に明くる夏の夜の曉方やあふごなるらむ

(一九一番)

・ほととぎす曉方の一声はうき世の中をすぐすなりけり

(一九七番)

などまでも同様に解釈すべきではあるまい。これは小林氏の「曉方」説を重視すれば、「明くる夏の夜」は決して視覚的な夜明けではなく、やはり日付が変わって翌日になる意とすべきであろう。当然あたりはまだ真つ暗なはずである。

これなどまさにほととぎすの声が「曉」を告げていることになる。そうなるるとほととぎすの鳴く時間帯も、「鶏鳴」と同様にある程度の幅があることになりそうだ。なお「時鳥」は渡り鳥であるから、夏以外の季節に歌に詠まれることはない。一年の中の夏だけに限定される歌語なのであるが、「有明の月」の限定用法と同様に、そういったことを意識している人は案外少ないようである。

四、「憂き曉」

「曉」が別れの時間だということを逆手にとれば、心情的に曉（別れの時刻）の到来を嫌がる歌も登場する。前述の①や『後拾遺集』の、

曉の鐘の声こそ聞こゆなれこれを入相と思はましかば

(九一八番)

がそうであるし、『相模集』の、

つむことありてたまさかに見ゆる人、静心なくてあ
はたしき心地のみすれば、思ひたらむもうるさうて、
小町が言ひけむやうに、

・逢ふことぞやがてものうき曉の夜深き我を思ひ出づれば

(二〇〇番)

も、たまさかにしか逢えないこともあって、逢うこと自体が「曉の別れ」の物憂さに直結して考えられている。

また曉に至れば、通ってくるはずの男はもはや通つて来ないという厳然たる事実が女につきつけられることになる。たとえは素性法師の、

⑨ 今来むといひしばらくりに長月の有明の月を待ち出でつるか

な

(二一)

は、素性が女の立場で詠んだ架空の歌（女歌）である。男のすぐ来るといふ言葉を信じて一晩中待ち明かし、ついに待っていた男は来ないで、待ちもしない「有明の月」が出たという展開になっている。ただし「有明の月」は「暁」に出ている月なので、当然月の出は「暁」より以前でもかまわない。この場合の「有明の月」は、前述のように「後朝の別れ」を象徴する「有明の別れ」であるから、「有明の月」の登場によって、もはや男は来ない（通ってくる時間帯が過ぎた）ことを実感させられているのではないだろうか。それこそがまさに暁の歌の本質ということになる。

これに近いことは赤染衛門の、

⑩ やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を

見しかな

(五九)

歌にも見ることができよう。出典である『後拾遺集』六八〇番の詞書には「たのめてまうでござりけるつとめて」とある。もし男が来ないことがわかっていたら、西に傾く月など見ていないで（待っていないで）さっさと寝てしまったのにと後悔しているからである。ここは月の出ではなく月の入りに近い。これ

がいつ頃の月かはわからないが、男が来ない時間になったということは、裏返せば「暁」になったということであろう。

さらに道綱母の例（五三）もこれにもあてはまる。出典である『拾遺集』九一二番の詞書には認められないものの、『蜻蛉日記』を見ると、

あかつきがたに、門をたたく時あり。さなめりと思ふに、憂くて、開けさせねば、例の家とおぼしきところにもものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

⑪ なげきつつひとり寝る夜のおくるまはいかに久しきものとかは知る

と、例よりはひきつくりひて書いて、移ろひたる菊にさしたり。
(新編全集100頁)

となっているからである。「あかつきがた」に兼家がやってきた（戻ってきた）のだから、これはどう考えても通ってくる時間帯ではあるまい。という以上に、この頃兼家は昼間道綱母の邸にいて、宵になると誰か別の愛人（町の小路の女？）のところへ通っており、やや変則（朝帰り）と見ておきたい。というのもまったく通って来ないというわけではないからである（女ではなく母的存在になった？）。それはさておき「あかつきが

た」ということで、道綱母は夫が女のところからの帰りだと推察したのであろう。これも「暁」の歌の要素として加えることができる。

いわゆる一夫多妻制において、自分が一人寝（独り寝）をするということは、夫が誰か別の女のところにいるということでもある。それは後宮における寵愛争いにも似ているし、女三の宮降嫁後の紫の上の心情にも通底している⁽⁸⁾。いづれにしても男女における「あかつきがた」という時間帯の重要性には留意すべきであろう。

五、日付変更時点を知る方法

最後に百人一首からは離れるが、「暁」に関する複雑な側面にも触れておこう。午前三時が日付変更時点であるとすると、それを過ぎると日付が翌日（明日）に変わることになる。ところがあたりは真っ暗であるし、寅の刻になったことがはっきりわからないこともあって、日記に書く場合に「暁」を前日の夜の延長として認識するか、あるいは暦日に則って明確に翌日と見なすかというややこしい解釈の揺れが生じている。

これが明確にできれば問題にはならないのだが、例えば『古今集』の七夕歌など、

七日の夜の暁によめる 源宗于朝臣

・今はとて別るる時は天の河渡らぬさきに袖ぞひちぬる

（一二二番）

とあって、「夜の暁」という奇妙な表現になっている。これなど暁（翌日つまり八日）になっているにもかかわらず、「七日（七夕）の夜」の延長として認識しているのであろう。ところが面白いことに、『宗于集』の詞書には「七月八日、あかつきによめる」とあって、こちらではちゃんと日付が「八日の暁」となっている。

これは単純な誤写などではなく、同じ暁を前日の七日の延長と見るか、それとも翌日の八日とするかという心情的揺れが反映していることと思われる。しかもその日は七夕だったので、前日の「七日」に強くこだわったのであろう。

同様の揺れは『源氏物語』御法巻における紫の上の死去・葬送場面にも認められる。

十四日に亡せたまひて、これは十五日の暁なりけり。

（五十一頁）

ここでいう「十五日の暁」が十五日の未明（十四日の夜の延長）なのか、それとも十六日の未明（十五日の夜の延長）なのか、判断が別れるところである⁹。それは紫の上が亡くなったのが十四日の未明なのか、十五日の未明なのかが明確にされていないからでもある。その前の記述に、

御物の怪と疑ひたまひて夜一夜さまざまのことを尽くさせたまへど、かひもなく、明けはつるほどに消えはてたまひぬ。
(506頁)

とある。これを見ると十三日の夜一晚中祈祷をさせたが、日付変更時点を越えた翌十四日の暁（真つ暗な時間帯）に亡くなったと読める。それは「明けぐれの夢」（同頁）の時間帯とも連続していた。その後、「ほのぼのと明けゆく」（509頁）「暁」の後半に至り、その時点が経過して「やがて、その日、とかくをさめたてまつる」（510頁）とあるのだから、葬儀はちょうど一日後の「十五日の暁」（十四日の夜の延長）に営まれたことになるろう。

暁を前夜の延長と見るのか、それとも日付変更時点を越えた翌日とするのかといった解釈の複雑さには伏線があった。それは「こよひ」に関する定義が二重構造になっているからである。

試みに「小学館古語大辞典」を見ると、

1 今夜。今晚 2 夜が明けて後、昨夜をいう語。昨夜。
昨晚。

と記されていた。「夜が明けて後」というのは問題であるが、「こよひ」は今夜だけでなく、昨夜の意味でも用いられるというわけである。もちろん二日にまたがっているのではなく、日付変更時点以前は普通に「今夜」であるが、日付変更時点を越えると、それ以前を「昨夜」と称するからである。同じ時間帯であっても、どの時点で把握するかによつて解釈が異なっているのである¹⁰。

たとえば『和泉式部日記』の、

五月五日になりぬ。雨なほやまず。一日の御返りのつねよりもの思ひたるさまなりしを、あはれとおほし出でて、いたう降り明かしたるつとめて、「今宵の雨の音は、おどろおどろしかりつるを」などのたまはせされば、（29頁）は、「つとめて」の時点における「今宵」であるから、その日の「今夜」ではなく「昨夜」と解釈せざるをえないことになる。また『後拾遺集』の、

物思ひけるころ、時雨いたく降り侍りけるあした、こ

よひの時雨はなど人のおとづれて侍りければよめる

少将井尼

・人知れず落つる涙の音をせば夜半の時雨に劣らざらまし

(八九六番)

にしても、詞書の「こよひの時雨」と歌の「夜半の時雨」が対応している。これを「あした」(翌朝)の時点から見ると、ここは「昨夜」と解するのがよさそうである。日付の認定には、こういったやっかいな問題を孕んでいるのである。

まとめ

以上、百人一首の「暁」を起点にして、「暁」の内包している問題を総合的に検討してみた。

「暁」は午前三時から日の出までの比較的長い時間帯であるが、その始まりは①日付変更時点であること、また②暁は男女別れる時間帯(暁の別れ・後朝の別れ)でもあること、③「暁」の始まりは真つ暗だが、後半は次第に明るくなる「しのめ・あさばらけ・あけぼの」と重なっていること、④だからといって「明く」を安易に夜が明けると解するのは危険である

こと、⑤「暁」の到来は視覚ではなく聴覚情報で察知したこと、また⑥視覚的な「有明の月」が象徴的に描かれていること、⑥だからこそ薄明るいという解釈がまかり通っていることなど、さまざまな問題点が指摘できたと思う。

平安時代の時間の概念をきちんと整理・把握することは、古典をより正確に理解する上で重要であることを、あらためて再確認した次第である。ここまできると百人一首以外の「暁」も、徹底的な再検討が必要ではないだろうか。そうでないと誤読していることにすら気付かない可能性がある。なお暁の重要性を指摘して下さった小林氏の学恩に感謝したい。

〔注〕

(1) 小林賢章氏「アカツキとヨハ」『アカツキの研究』(和泉書院)平成15年2月参照。なお本論は小林氏の御研究から多大の恩恵を蒙っている。

(2) 小林賢章氏「夜をこめて」考」同志社女子大学学術研究年報62・平成23年12月参照。ただし「一晚中」だと、継

院）平成22年5月参照。なお室田知香氏「『源氏物語』第二部後半の『竹取物語』受容」中古文学85・平成22年6月でもこのことに言及されている。

(10) 「昨夜」「昨晚」においても同様の時差が生じていた。小林賢章氏「コヨヒ考」『アカツキの研究』和泉書院・平成15年2月参照。